

チェスターフィールドの「世界」－「コモン・センス」の政治学－

木村俊道（九州大学法学研究院）

本報告は、18世紀イングランドの第4代チェスターフィールド伯（1694-1773）に焦点をあて、彼の政治思想を、ルネサンス期以降における「文明の作法」civilityの伝統に即して理解することを目指す。

チェスターフィールドは、ウォルポール政権に対する「オポジション」の代表的人物の一人であったが、その一方で、ジョージ2世の国王寝室付侍従、枢密顧問官、ハーグ駐在大使、王室長官、アイルランド総督、そして秘書長官を歴任した宮廷人である。彼の名前は一般に、死後に出版された『息子への手紙』（1774）によって知られている。しかし、「何事においてもマナーがすべてである」と述べる同書はまた、「腐敗」した宮廷人の「偽善」と「欺瞞」を示した作品として、マキアヴェッリの『君主論』に匹敵するほどの猛烈な非難を巻き起こした。『息子への手紙』を「売春婦の道徳」や「ダンス教師のマナー」を記した書物として罵倒したサミュエル・ジョンソンはその一例である。

しかしながら、本報告では逆に、政治思想史の観点からチェスターフィールドの再評価を試みる。すなわち、彼はルネサンス期以降における「文明化の過程」（エリアス）の頂点に位置する「完全」な宮廷人の一人であった。彼の思想世界の形成にあたっては、モンテスキューやヴォルテールといった大陸の思想家や、ボーリングブルックらとの交流も見逃せない。そして、チェスターフィールドの政治思想は、初期近代ヨーロッパにおける「作法書」civility bookの伝統と、同時代における「コモン・センス」common senseの集大成であった。彼の『息子への手紙』に関して、たとえばバジル・ウィリーは、ヒュームの哲学体系を「行動の基準や実践の目標」として提示したテキストとして評価している。

本報告では、以上のような「チェスターフィールドの世界」を、『息子への手紙』における作法論・宮廷論・教育論・大陸旅行論・外交論などに加え、『ザ・ワールド』*The World* や『コモン・センス』*Common Sense* などに彼が寄稿したエッセイ、同時代人に対する「人物評」*Characters*、そしてニュー・カッスルなどに宛てた政治書簡等を通じて再構成する。同時にまた、世紀末までに100版を超えた『息子への手紙』（とその抜粋集など）の受容や、チェスターフィールドに対する批判や非難の過程を追跡することによって、初期近代におけるcivilityの世界から、産業革命とフランス革命という「2つの革命」を経た19世紀以降のcivilizationの世界への「文明の転換」を明らかにしたい。